

41878

教科書文庫

4
815
41-1940
20000 34766

40

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

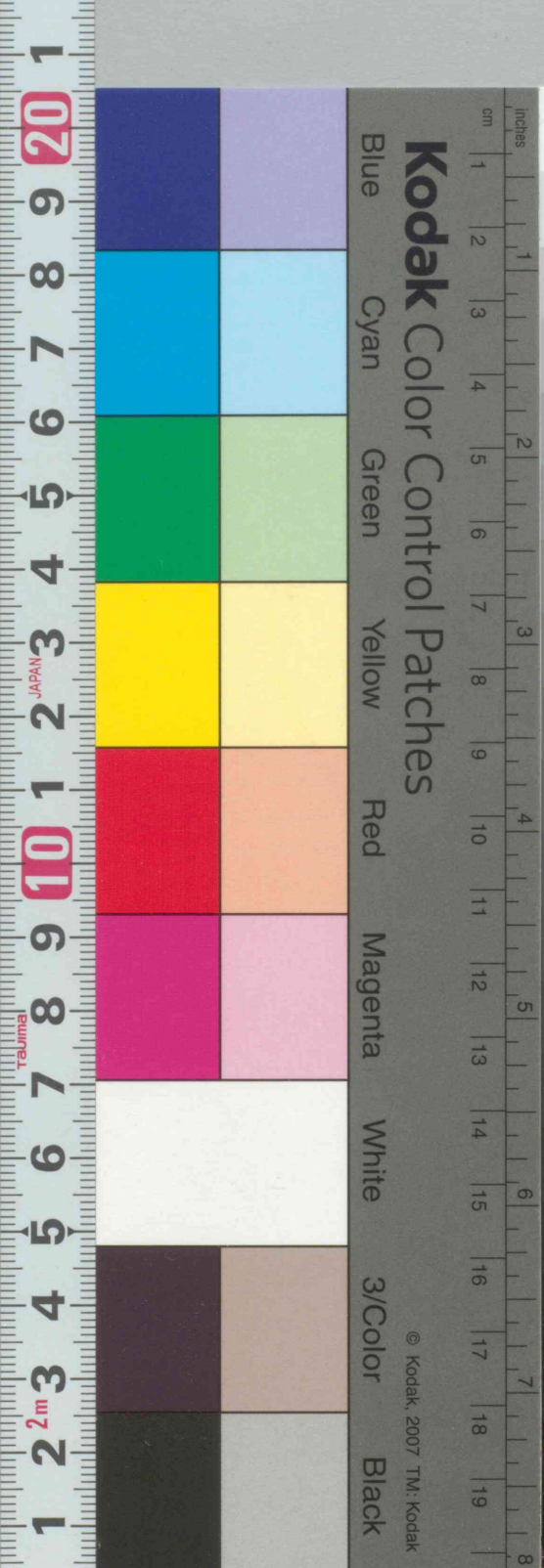


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Iw 1
資料室

岩井良雄著

中學口語法

[修正版] 第一學年用

教科
41
200



教科書文庫
4
815
41-1940
2000034766

資料室

395.9
Iw1

昭和十五年八月八日
文部省檢定濟
中學校國語・漢文科

中學口語

岩井良雄著



第一學年用

広島大学図書
2000034766


375.9
Iw1



序 言

- 一 本書は、中學校第一學年用文法教科書として編述したものである。
- 一 本書は、教授要目の規定に従ひ、口語法の全般にわたつてその大要を記した。
- 一 品詞については最も平明な語について説明し、文の構成に關しては、單文の成分を述べるに止めた。理解を容易ならしめんことを期した爲である。

序 言

一 國定讀本を標準とし、なるべくその代表的な事項について述べた。

一 本書に述べなかつた事項は、第三學年の文語法に即して明かにする意圖である。

昭和十五年四月

著者 しるす

中學口語法

(修正版) 第一學年用

目次

一	文	一
二	單語及び品詞	三
三	名詞	四
四	代名詞	六
五	動詞	九
六	形容詞	一一
七	形容動詞	一三
八	副詞	一五

九 接續詞 一七

一〇 感動詞 一九

一一 助動詞 二一

一二 助詞 二三

一三 動詞の活用 二五

一 活用形 二五

二 活用の種類 二七

一四 形容詞の活用 三五

一 活用形 三五

二 活用の種類 三六

一五 形容動詞の活用 三九

一六 動詞・形容詞の音便形 四一

一七 助動詞の種類と活用 四五

一 動詞の音便形 四一

二 形容詞の音便形 四三

受身の助動詞 四五

可能の助動詞 四五

尊敬の助動詞 四六

使役の助動詞 四七

打消の助動詞 四九

完了の助動詞 五一

推量の助動詞 五二

願望の助動詞 五三

指定の助動詞 五四

一八 助動詞の續き方 五八

一九 助詞の用ひ方……………六三

一 體言に附く助詞……………六三

二 用言に附く助詞……………六五

三 諸語に附く助詞……………六九

二〇 文の成分……………七四

一 主語……………七四

二 述語……………七五

三 修飾語……………七七

四 獨立語……………八一

一 動詞活用表……………

二 助動詞活用表……………

三 助動詞接續表……………

目次終



中學口語法 (修正版) 第一學年用

一文

櫻が 咲く。
空が 青い。

牧場の牛が のどかになく。

これらは、それぞれ文である。文はまとまつた考をあらはし、言ひ切つてある。而して、櫻が、空が、牛がのやうな言葉を主語といひ、咲く、青い、なくのやうな言葉を述語といふ。主語は文の主體となる言葉、述語は主體の動作狀態等を述べる言葉である。又牧場のの

文
主語
述語

一文

修飾語

どかにのやうに、他の言葉にそへて用ひる言葉を修飾語といふ。修飾語は、修飾される言葉の意味を明かにするものである。

練習一

次の文から主語述語修飾語を選び出せ。

- 一 朝日がかゞやく。
- 二 菜の花がにほふ。
- 三 風が静かに柳をわたる。
- 四 岸の山吹が黄金色に咲きはこる。
- 五 かなりやの聲が朗かに聞える。
- 六 合圖の呼子がびり／＼と鳴つた。
- 七 堤の櫻ははなやかに咲續いてゐる。
- 八 椿の赤い花がぼたりと落ちる。

單語

二 單語及び品詞

ひばり が 高く あがる。
 花園 に 春風 が 吹き ます。

右の文は「ひばり」が「高く」あがる、及び「花園」に「春風」が「吹き」ますのやうに分けられる。これらの一つ一つを單語といふ。花園・春風のやうに、二單語以上結合して更に一つの意味をあらはすものも單語である。

單語には、ひばり・春風のやうに、物事の名をあらはし、語形の變らぬいもの、あがる・吹き・高くのやうに、物事の動作・状態等を述べ、語形の變るものもある。吹きは「吹か・吹き・吹く・吹け」と變るのである。又ひばり・高く・あがる等は、獨立して用ひられ、主語・修飾語・述語等になることが出來、がに・ます等は常に他の語に附屬して用ひられる。

品詞

このやうに單語には、意味、語形用ひ方がある。
單語をその語形用ひ方、意味から分類したものを品詞といふ。
品詞には名詞、代名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞、助詞の十種がある。

練習 二

次の文を單語に分けよ。

- 一 松と落葉松とは彈力に富む。
- 二 家の中からピアノの音が聞える。
- 三 すゞなりの柿が赤々と照つてゐる。
- 四 彼が古木の皮をむくと、珍しい甲蟲が二匹ゐた。
- 五 商業は之に従事する商人だけを利するためのものではない。

三名詞

名詞

春が來た。北國の雪も解初めたので、柴田勝家の將佐久間盛政は一萬五千の兵を率ゐて、近江に討つて出た。
右の文で、春、北國、雪、柴田勝家、將佐久間盛政、兵、近江は、いづれも物事の名をあらはす詞である。かういふ詞を名詞といふ。又一萬五千のやうな、數に關する詞も名詞である。

練習 三

次の文から名詞を選び出せ。

- 一 人は火を用ひる動物といはれてゐる。
- 二 カイロの都に來て、始めて緑の椰子の木陰を見ました。
- 三 街路をさしはさんで、大商店が軒をつらね、河岸には領事館、税館をはじめ、銀行會社等のりつばな建物がそびえてゐる。
- 四 宣長は三十五年の努力を續けて、古事記の研究を大成した。

五 日本國民はその長所として廉恥を貴び潔白を重んずる美德を發揮してゐる。

四 代名詞

柔かな新緑の活きかへる時、私は遠いあちらの空に、曾て信濃の山の上に望んだと同じやうな白い暮春の雲を、こどもも見つけます。それが微風に吹かれて絶えず形をかへるのを望みます。

右の文で、私、あ、ち、ら、こ、こ、それはいづれも物事の名をいふ代りにこれを指示する詞である。かういふ詞を代名詞といふ。

代名詞の中で、私、のやうに、人を指示するものを人代名詞といひ、あ、ち、ら、こ、こ、それのやうに、方向・場所・事物を指示するものを指示代名詞といふ。

代名詞
人代名詞
指示代名詞

人代名詞には次のやうなものがある。

私	あなた	彼	どなた
僕	君		誰

又、指示代名詞には次のやうなものがある。

事物	これ	それ	あれ	どれ
場所	ここ	そこ	あそこ	どこ
方向	こちら	そちら	あちら	どちら

疑問代名詞
テアル

體言

名詞・代名詞を併せて體言といふ。體言は文の主語になることが

出來語形が變化しない。

練習 四

次の文から代名詞を選び出し、且人代名詞指示代名詞を區別せよ。

- 一 あなたのお心掛には全く感心しました。
- 二 此處は何處だらう。一體わしは今まで何をしてゐたのだらう。
- 三 彼は名高い學者を尋ね廻つて説を聞いたが、どれにも満足するところが出來なかつた。
- 四 ねちが無い。誰だ、仕事臺の上をかき廻したのは。ねちはある一ツしか無いのだ。
- 五 私がかね／＼古事記を研究したいと思つてをります。それについて、何か御注意下さることはございますまいか。
- 六 弟はあちらこちら曆をくつてゐるうち、ふと八十八夜の文字に目

をとめて、こゝに「八十八夜」とありますが、これは何ですか。」とたづねると、父は、それは立春から數へると八十八日目で、稻をはじめ、大ていの物の種をまく目安になる日だ。」と教へた。

七 兄と私は並んで席を取つた。前の席には朝鮮服を着た人が腰掛けた。さうして、「どちらへいらつしやいますか。」と私に話しかけた。

八 夜の燈火をしたつて來る蟲は、蛾や、こがね蟲や、羽蟻が多く、どれもこれも、たゞうるさいだけであるのにと、ここからか、かすかに羽音がして、障子に軽くばさりと止つた蟲が、やがて、「スイツチヨ、スイツチヨ。」をくりかへす。

五動詞

汽車は野を過ぎ、山を越えて進む。
我が國民には、櫻の花の一時に咲き、一時にちる、風情を喜

動詞

ぶ風がある。
右の文で、過ぎ、越え、進む、咲き、ちる、喜ぶは、物事の動作を述べ、あるは物事の存在を述べる詞である。かういふ詞を動詞といふ。

動詞の語形は様々に變化する。例へば、
進ま 進み 進む 進め

越え 越える 越えれ 越えよ(ろ)

この中、「進」「越」等の部分を語幹といひ、「ま」「み」「む」「め」「え」「えろ」「えれ」「えよ」等の部分を語尾といふ。多くの動詞は語幹と語尾とをそなへてゐる。

語幹
語尾

練習 五

次の文から動詞を選び出せ。

一 汽車は密林の間を通り、やがてトンネルにはいる。

二 午前五時の鐘が鳴ると、當直將校が元氣のよい聲で號令をかける。

三 帽子の下から汗が流れ落ちる。息が苦しい程はずむ。

四 梢を吹く風がざわ／＼と音を立てる。背戸の秋海棠がかはいらしい淡紅色の花をつける。

五 眺望臺で眺めると、道を往來する人間や自動車などは、まるで蟻のはふやうに見える。

六 海を離れ、田舎道に入る。道にはトンネルがある。これを抜けると、目の前に誕生寺の背面がその姿をあらはす。

七 和琴半島の優美な姿を賞しながら進むと、湖景は快く開けて、水上に美しい中島を望み、對岸に秀麗な藻琴山を仰ぐ。

六 形容詞

明治天皇は、これを仰げば、いよいよ高く、ますます尊い。
我が國の美しい風景は、自然美を愛好するやさしい國民

形容詞

性を育成した。

右の文で、高く、尊い、美しい、やさしいは、物事の狀態、性質等を述べる詞である。かういふ詞を形容詞といふ。

形容詞の語形は次のやうに變化する。

高く 高い 高けれ

美しく 美しい 美しけれ

形容詞にも語幹と語尾がある。「高」「美」等は語幹、「く」「い」「けれ」は語尾である。

練習 六

次の文から形容詞を選び出せ。

- 一 松は青く、樓門は赤く、花は極めて白い。
- 二 動物園の白熊は寒ければ寒いほど元氣が出る。

三 バナマ地峽は低い小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。

四 山畑に稗ひらの作つてあるのも珍しく、谷間に白い山ゆりの花の見えるのも面白い。

五 寶石をちりばめたやうなかはい目、紅をさしたかと思はれるや、さしいくちばし、美しい羽毛に包まれた圓い胸、鳩は見るからに愛らしいものである。

六 澄んだ青空に刷毛で軽くはいたやうな、又は眞綿を薄く引きのばしたやうな白い雲の出るのを巻雲といひます。ごく細かい水の粒の集つたもので、雲の中でも一番高く、八千米から一萬二千米の上空に浮んでゐます。

七 形容動詞

今日は波が静かだ。

形容動詞

用言

聲と聲とが入亂れて非常ににぎやかです。
 國家の爲に富源を開發することが甚だ多かつた。
 右の文で、静かだにぎやかです多かつたは、形容詞のやうな意味を有し、その語形が動詞に似てゐる。かういふ詞を形容動詞といふ。形容動詞は、だですかつ等の語尾をもつてゐる。ですの語尾をもつ形容動詞は、鄭重に述べる場合に用ひられる。動詞・形容詞・形容動詞を併せて用言といふ。用言は文の述語になることが出來、語形が變化する。

練習 七

次の文から形容動詞を選び出せ。

- 一 地面は霜で真白だ。
- 二 此處の建物は一般に壯麗です。

下切

- 三 早く來い。向かふは晴れて、山がすてきだぞ。
- 四 彼がふと目を覺した時はもう遅かつた。
- 五 軍艦旗が風にひらめきながら上つて行く様は實におそろかです。
- 六 波の上に點々と白帆が浮んでゐるのは、野や山ばかり見て來た目に殊さらうれしかつた。

八 副詞

浪が打つと、白いしぶきがばつと立つ。
 雲雀の聲がのどかに聞える。

上海には外國人の居留する者が甚だ多い。
 今朝は鳥の聲までたいそう朗かです。
 右の文で、ばつとのどかに甚だたいは、それぞれ動詞・形容詞・形容動詞の意味を修飾する詞である。かういふ詞を副詞といふ。

副詞(二)

廣い草原の景色が甚だのどかに感ぜられる。
園遊會はたいそう賑かに催された。

右のやうに副詞には、他の副詞の意味を修飾し得るものもある。
甚だたいそうは、それぞれのどかに賑かにといふ副詞の意味を修飾してゐるのである。

多分明日は雨が降るだらう。
どうぞ午後お出で下さい。

右の多分、どうぞは、下文の述べ方を修飾してゐる。これも副詞である。

副詞は、主語になることは出来ないが、修飾語となることが出来る。形が變化しない。

練習 八

副詞(二)

次の文から副詞を選び出せ。

- 一 我が國に産する木材は、その種類が頗る多い。
- 二 後を追つて御いでになつたら、大てい追ひつけませう。
- 三 北上川はまだ見えるが、いよ／＼せまくなつてとう／＼谷川になつてしまつた。
- 四 船の上からはしきりに勵ましてくれる。これに力を得て、一しやうけんめいに泳いで行く。
- 五 松の緑色が鮮かに浮出して見えるのは實にきれいです。
- 六 朝かなり早く起きたつもりでも、もう太陽はうらく／＼とのぼつてゐる。雲雀の歌が、かすんだ空に、のどかに聞かれる。
- 七 すごい程美しい神祕の淵、とても物を投入れる氣になれない。
- 八 空が急に眞暗になつたと思ふと、忽ち大雨が降出した。

九 接續詞

接續詞

答案は毛筆又はペンで書きなさい。

入場者は制服或は袴を着用して下さい。

日は暮れかゝつた。しかし人里はまだ見えない。

私はあまりにも不用意であつた。だから失敗したのだ。

右の文で、又は、或は、しかし、だからは、語や文を接續する詞である。

かういふ詞を接續詞といふ。

接續詞は、主語・述語にならず、語形も變化しない。

練習 九

次の文から接續詞を選び出せ。

- 一 各種の木材中、用途の廣いのは杉及び檜である。
- 二 この地は景色もよく、それに氣候も暖かです。
- 三 南支那海にさしかゝると、海は急に朗かな、しかも濃い青さを見せました。

- 四 彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。そこで彼は先づ近處の河に浴し、少女のさゝげた牛乳を飲んで元氣を回復した。ところがこの新たな態度に驚いた五人の友は彼が全く修行を止めてしまつたものと思ひ、彼を捨てて立去つた。
- 五 法律は、國家といふ共同生活を、秩序ありかつ幸福なものにするための規則である。
- 六 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力も大方電氣に變つた。
- 七 しばらくして奏樂がやんだ。すると樂長がつか／＼と私のそばへ來た。さうして「あなたのために日本の曲をやりませう。」といさつした。

一〇 感動詞

あゝ、此のむざんな光景を御らんなさい。

やあ、皆さん御苦勞ですな。

感動詞

どれ、お茶を一つ御ちそうになりませう。
 もい、あなた、何か落ちましたよ。
 いえ、私は何も知りません。
 右の文で、あ、やあ、どれ、もい、い、いえは、感動、呼掛け、應答等をあらはす詞である。かういふ詞を感動詞といふ。
 感動詞も主語・述語にはならず、語形も變化しない。

練習 一〇

次の文から感動詞を選び出せ。

- 一 「おや、まあ可愛らしい。」と母が言ひました。
- 二 こら、どうした。命が惜しくなつたか。
- 三 私は思はずやあ、すつかり變つた。」と聲をあげると、兄は「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」といつた。
- 四 あ、面白かつた。おや、北斗星が半分杉林にかくれてしまつた。

- 五 門を守つてゐた兵士等は、それ、勝が來た、勝が來た。」と、ひしめきながら、一せいに行くてを遮つた。
- 六 あれ、松蟲が鳴いてゐる。
- 七 さあ、そろそろ 瀧見に行かうかな。
- 八 お、聞多。 しつかりせい。敵は誰だ。
- 九 ほう、お前が子馬の世話をしようといふのか。よからう。一つやつてごらん。
- 一〇 法親王は、いや、御苦心の程お察し申します。」と仰せられただけで、やがて御退出になつた。

一一 助動詞

今日こそ最後の確答を得よう。
 嚴島は昔から日本三景の一にかぞへられる。
 こゝは南洋の寶島といはれてゐます。

助動詞

夜はほのくくと明けそめた。
十分に獨創力を發揮して、世界文化の上に貢獻したい。
何人も其の勇ましさに感心しないものはあるまい。

山川さんは實にえらい人だ。

右の文で、よう、られる、れ、ます、たい、ない、まいは、いづれも動詞に附いて、その意味を助ける詞である。かういふ詞を助動詞といふ。又だ、は體言に附いてゐるが、これも助動詞である。助動詞も多くは其の語形が變化する。例へば、

られ られる られれ られよ(ろ)
たく たい たけれ

練習 一一

次の文から助動詞を選び出せ。

- 一 此處には軍司令部や停車場などがあります。
- 二 リンカーンは百年餘り前、アメリカ合衆國ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。
- 三 私は叔父さんに連れられて宿に着いた。
- 四 晴れてゐる割合に、今日は遠望がきかない。
- 五 宣長は學問を以て身を立てたいと一心に勉強してゐた。
- 六 人にはたよるまい。自分一人で修行をしよう。

一二 助詞

釋迦は、八十歳の高年になつても、なほ各地を巡つて、道を傳へてゐたが、病を得て、クシナガラ附近の林中に留まつた。危篤の報が傳はると、これまで、教を受けた人々が四方から集つて別を惜しんだ。

助詞

お、三郎さんか。毎日よく精が出ますね。
 右の文で、は、の、に、で、も、を、で、が、と、ま、で、か、ら、か、ね、は、種々の語に附いて、
 他の語との關係をあらはし、或は意味をそへる詞である。かうい
 ふ詞を助詞といふ。
 助詞は語形が變化しない。

練習 一二

次の文から助詞を選び出せ。

- 一 誰が何と言つても門をあけるな。
- 二 高橋さんの話は、それからそれへと續いた。
- 三 池のほとりをたどりながら、數時間歩いた。
- 四 今度の候補者の中に、あの人ならばと思はれる人がある。
- 五 東京から此所までは二キロもあるが、來て見ると、それほど遠い所に來た氣がしないね。

動詞の活用

- 六 大和平野が繪よりも美しく見える。
- 七 楠正行は四條畷で戦死した。
- 八 昨夜より少し沖へ出たな。きつと大れふだぞ。

一三 動詞の活用

一 活用形

動詞は用ひ方によつてその語形が變化する。例へば、

- 一 話を聞かない。
- 二 話を聞きます。
- 三 話を聞く。
- 四 話を聞く、學生がある。
- 五 その話を聞けば、きつと面白いだらう。
- 六 話を聞け。

活用
活用形

このやうに語形の變化することを活用といひ、その變化した一つ一つの形を活用形といふ。動詞の活用形には次の六形がある。

未然形 「聞、か、ない」のやうに、ないのつき得る形である。もと「聞

か、う」のやうに、事がらの未だ起らない意をあらはすことから生じた名稱である。

連用形 「聞、き、ます」のやうに、ますのつき得る形である。もと「聞、き、傳へる」のやうに、他の用言に連なり得ることから生じた名稱である。

終止形 「話を聞、く」のやうに、文の終止をあらはし得る形である。

連體形 「聞、く、學生」のやうに、體言に連なり得る形である。

假定形 「話を聞、けば」のやうに、事がらを假定する意をあらはし得る形である。

命令形 「話を聞、け」のやうに、命令の意をあらはし得る形である。

活用
活用の種類

練習 一三

次の動詞について、その活用形を説明せよ。

行、かう 行、かう
守、れ 守、れ
知、る 知、る
閉、ぢよ 閉、ぢよ
飲、まな 飲、まな
立、た 立、た
言、ふ 言、ふ
参、り 参、り

二 活用の種類

四段活用

- 鶯はまだ鳴、か、ない。 (未然形)
- 雁が鳴、き、ます。 (連用形)
- 雲雀が空に鳴、く。 (終止形)
- 屋根に鳴、く、雀。 (連體形)
- 雞が鳴、けば、皆起き出すだらう。 (假定形)
- 早く來、て、鳴、け。 (命令形)

四段活用

右の鳴くは、五十音のア段・イ段・ウ段・エ段に活用する。このやうな活用を四段活用といふ。

降 死 譯 鳴	未然形
ら な さ か	連用形
り に し き	終止形
る ぬ す く	連體形
る ぬ す く	假定形
れ ね せ け	命令形

練習 一四

次の動詞の活用を述べよ。

持つ 愛す 習ふ 遊ぶ 行く 知る 好む 仰ぐ

上一段活用

隣の人はまだ起きない。

(未然形)

上一段活用

右の起きるは、五十音のイ段の音を本とし、その中の或ものなるれよの附いた活用である。このやうな活用を上一段活用といふ。

起 信 見	未然形
き じ み	連用形
きる じる みる	終止形
きる じる みる	連體形
きれ じれ みれ	假定形
きよろ じよろ みよろ	命令形

練習 一五

逃金 金言 比倫 見 歩 用 主 歩 用 主 流

げ	せ	め	へ	べ	め	之	せ	け	け	よ	れ
げ	せ	め	へ	べ	め	之	せ	け	け	よ	れ
げ	せ	め	へ	べ	め	之	せ	け	け	よ	れ
げ	せ	め	へ	べ	め	之	せ	け	け	よ	れ
げ	せ	め	へ	べ	め	之	せ	け	け	よ	れ

未然 連用 終止

勝つ 勝つ け 連用 勝つ け 連用

勝受	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
て	て	て	てる	てる	けれ	けよ(ろ)
て	て	て	てる	てる	めれ	めよ(ろ)

書ける 勝てる 死ぬる 読める

助詞をつくる。
 教育される
 研究させる
 歩ける
 載せる
 採用される

用 下 一段活

右の受けるは、五十音の工段の音を本とし、その中の或ものなるれよの附いた活用である。このやうな活用を下一段活用といふ。下一段活用の動詞には、次の語のやうに命令形のないものがある。

人から非難を受けない。
 あなたのお指圖を受けます。
 命令を受ける。
 謝禮を受ける者がない。
 試験を受ければ合格するだらう。
 早く検査を受けよ(ろ)。

(未然形)
 (連用形)
 (終止形)
 (假定形)
 (命令形)

き	い	わ	ざ	り	せ	の	ま	た
き	い	わ	ざ	り	せ	の	ま	た
き	い	わ	ざ	り	せ	の	ま	た
き	い	わ	ざ	り	せ	の	ま	た
き	い	わ	ざ	り	せ	の	ま	た

報いる 着る

次の動詞の活用を述べよ。

生きる 下りる 恥ぢる 亡びる 報いる 着る

下一段活用

人から非難を受け、ない。(未然形)

あなたのお指圖を受け、ます。(連用形)

命令を受け、。(終止形)

謝禮を受け、る者が、ない。(連體形)

試験を受け、れば合格するだらう。(假定形)

早く検査を受け、よ(ろ)。(命令形)

用 下一段活

右の受け、るは、五十音の工段の音を本とし、その中の或もの、に、る、れ、よ、の附いた活用である。このやうな活用を下一段活用といふ。下一段活用の動詞には、次の語のやうに命令形のないものがある。

る行下段活用
勝つ け連ふ
勝つ け連ふ
る行下段活用

書ける 勝てる 死ぬる 讀める

受	勝	眺				
け	て	め	め	め	め	め
ける	てる	ける	てる	ける	てる	ける
けり	てり	けり	てり	けり	てり	けり
けよ	てよ	めよ	めよ	めよ	めよ	めよ
命令形						
連體形						
終止形						
連用形						
未然形						

さ、れる、させ、るも下一段活用の動詞であるが、これらの語は、他の語と結合して多くの下一段活用の動詞をつくる。

禁止される 攻撃される 教育される

旅行させる 出席させる 研究させる

練習 一六

次の動詞の活用を述べよ。

流れる 据ゑる 助ける 歩ける 載せる 採用される

次の動詞の活用を述べよ。

生なきる 下くだりる 恥はぢる

下一段活用

人から非難を受け、
あなたのお指圖を受け、
命令を受け、
謝禮を受け、
試験を受け、
早く検査を受け、

右の受けるは、五十音の工段の音
よの附いた活用である。このや
下一段活用の動詞には、次の語の

用 下一段活

早く検査を受け、(ろ)

書ける 勝てる 死ぬる

受	勝	眺
け	て	め
け	て	め
け	て	め
け	て	め

各下段連用
勝つ け連用
名置連用

される、させるも下一段活用の動詞
と結合して多くの下一段活用の

禁止される 攻撃される
旅行させる 出席させる

練習 一六

次の動詞の活用を述べよ。

流れる 据ゑる 助ける

Handwritten notes on the top right flap, including numbers like 15, 90, 3, 19, 155.

見える 修める 比べる 言へる 重ねる 実行させる
企てる 逃げる

か行變格活用

弟はまだ歸つて來ない。(未然形)
來年また來ます。(連用形)
もうぢきに秋が來る。(終止形)
吹いて來る風が涼しい(連體形)
君が來れば僕の弟はきつと喜ぶよ。(假定形)
早くこゝへ來い。(命令形)

か行變格活用

右の來るは、か行において不規則に活用するから、これをか行變格活用といふ。
か行變格活用の動詞は來るの一語だけである。

[來]	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
	こ	き	くる	くる	くれ	こい

さ行變格活用

私は遅刻をせぬ(しな)。 (未然形)
私も勉強をします。(連用形)
僕は毎朝散歩をする。(終止形)
彼のする事には間違がない。(連體形)
彼を級長にすれば責任を以て當るだらう。(假定形)
自分の事は自分でせよ(しろ)。(命令形)

さ行變格活用

右のするは、さ行において不規則に活用するから、これをさ行變格活用といふ。

さ、行變格活用の動詞は、するの一語だけである。

終止形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
する	し	し	する	する	すれ	せよ
	し	せ	し	し	し	しろ

するは他の語と結合して、多くのさ、行變格活用の動詞を作る。

運動する 出發する 讀書する 論ずる
 手習する 暇乞する 朝起する 討死する

練習 一七

次の文から動詞を選び出し、その活用を述べよ。

- 一 平安神宮を拜して大極殿の面影をしのび、南禪寺の山門を尋ねて途に疏水を見るのも感興が深い。
- 二 長崎から海上を走ること約四百海里で揚子江の河口に達する。

形容詞の活用

- 一 それから五十海里ばかりさかのぼり、黄浦江といふ支流に入り、更に十海里餘りさかのぼると、其の西岸にある上海に着く。
- 二 もう二三年たてば、君たちも槍へ登れる。
- 三 警衛の兵士等は、安芳の姿を見ると、一時に押寄せて来たが、西郷が後にゐるのを見て、一同恭しく捧げ銃の禮をした。
- 四 交通整理のうまく行くのにつく／＼、感心させられる。
- 五 午後九時、まだ新聞の讀める程の明るさだ。
- 六 朱の色のおざやかな大鳥居を望む時、神域のけだかさをしみ／＼と感ずる。

一四 形容詞の活用

一 活用形

水が清く、澄んでゐる。
 水が清い。

活用形

清い水が流れる。
清ければ汲んで飲もう。
形容詞の活用形は右の四形で、連用形・終止形・連體形・假定形と呼ばれてゐる。

練習 一八

次の形容詞について、その活用形の名を述べよ。

- 喜ばしい
- 浅ければ
- 深い谷
- おもしろく歌ふ
- 赤い花
- 無い
- 早く走る

活用の種類

二 活用の種類

く 活用

- 笛の音が遠く聞える。
(連用形)
- 道はかなり遠い。
(終止形)

く 活用

遠い山が雲のやうに見える。
(連體形)
遠ければ自動車で行かう。
(假定形)
右の遠いは「遠く・遠い・遠い・遠けれ」と活用する。このやうな活用をく活用といふ。

しく 活用

風が涼しく吹く。
(連用形)
夕立がはれて風が涼しい。
(終止形)
青田の上を涼しい風が吹く。
(連體形)
風が涼しければ庭へ出よう。
(假定形)
右の涼しいは「涼しく・涼しい・涼しい・涼しけれ」と活用する。このやうな活用をしく活用といふ。
く、活用しく、活用の語尾は一致する。

しく 活用

涼し	遠				
		未然形	連用形	終止形	連體形
			く	い	い
				い	けれ
					命令形

練習 一九

次の文から形容詞を選び出して、その活用を述べよ。

- 一 不意にかん高い鳥の聲が聞えた。
- 二 眞淵はもう七十歳に近く、りつばな著書もあつた。
- 三 山畑の其處此處に野梅の咲きこぼれてゐるのも面白く、霜よけのわらの間から黄色い夏みかんがちら／＼見えてゐるのもめづらしい。
- 四 けやき、栗かしは何れも甚だ堅く、もくめもこまやかである。中にもけやきは、もくめが美しく磨けば美麗な光澤を生じ、又くるひが少いから、裝飾材として珍重される。

形容動詞の活用

五 何時の間にか、丈の低い細い木が目につくやうになつた。遂にはそれもなくつたと思ふと、眼界が急に開けた。

一五 形容動詞の活用

波は多分静かだらう。(未然形)

昨日は波が静かだつた。(連用形)

風が止んで、海上は静かだ。(終止形)

あの静かな波をごらんなさい。(連體形)

波が静かなら泳ぎませう。(假定形)

活用形

右の静かだの語尾は「だらうだつたななら」と活用し、その活用形は、未然形、連用形、終止形、連體形、假定形の五形である。又「ぎやかです多かつ」等の語尾で「すかつも、それく」活用する。

多	静か	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
から	だ	だ	だ	だ	な	なら	
かつ	だ	だ	だ	だ	な	なら	

練習 二〇

一 次の形容動詞について、その活用形の名を述べよ。

- さびし さびし 見事 見事 鮮 鮮 かつた かつた
- りつば りつば 人物 人物 楽しい 楽しい さわやか さわやか だらう だらう
- きれいな花 きれいな花 すこやか すこやか 愚 愚 でした でした
- 愉快 愉快 溫和 溫和 なら なら

二 次の文から形容動詞を選び出して、その活用を述べよ。

一 往來の頻繁な街上でも、よく警官の指揮に従ふ。

二 あなたは日本語が上手です。

三 あそこの植付をした時はまだ寒かった。

四 かんこ鳥の聲は、朝かな中にも一種のさびしさを持つてゐる。

五 奔流の上に高い橋がぐら／＼と動くので、すてきに愉快だった。

六 この菊が咲きそろつたら、すゐぶんきれいだらうな。

七 弟は、理くつよりも實際の物を作るのが得意でした。

びみには びみには ひちり ひちり は は つま つま まい まい ひは ひは う う 音 音 を を 使 使 け け け け なる なる 動 動 詞 詞 音 音 使 使

一六 動詞・形容詞の音便形

一 動詞の音便形

四段活用の動詞の連用形は、それにて、たのつゝく時、他の音にかはる。そのかはつた形を動詞の音便形といふ。

い音便形

雁が鳴いてゆく。

書く 書く (終止形)
書き 書き (連用形)
書い 書い (終止形)
書い 書い (終止形)
書い 書い (終止形)
書い 書い (終止形)

動詞の音便形

い音便形

手紙を書いて送る。
右の鳴い書いは、それ〴〵語尾がい音にかはつてゐるから、この形をい音便形といふ。

う音便形

う音便形

流に沿うて進む。
聖賢を訪うて教を受ける。
右の沿う訪うは、それ〴〵語尾がう音にかはつてゐるから、この形をう音便形といふ。

促音便形

知つて知らないふりをする。
危機は既に目前に迫つた。
右の知つ迫つは、それ〴〵語尾が促音にかはつてゐるから、この形

ま(い)にかはる

音便

(訪い)が(訪)ひ(う)た(ひ)て(う)は(か)る

ひ—かうにかはる。

り(ち)ひ(つ)にかはる

思(ひ)つ 思(ひ)つ

知(る) 知(る)

迫(る) 迫(る)

迫(る) 迫(る)

促音便形

を促音便形といふ。

撥音便形

鳩が向かふへ飛んで行く。
生徒が行儀よく並んだ。
右の飛ん並んは、それ〴〵語尾が撥音にかはつてゐるから、この形を撥音便形といふ。

讀(む)

讀(む) 讀(む)

飛(ぶ) 飛(ぶ)

飛(ぶ) 飛(ぶ)

に(い)ひ(つ)

ん(い)にかはる

形容詞の音便形

二 形容詞の音便形

形容詞の連用形は、それに「ございます」がつゞく時、うの音にかはる。そのかはつた形を形容詞の音便形といふ。

う音便形

お早うございます。
よろしくございます。

早くがございすは、早くが—うにかはる。

う音便形

右のお早うよろしうは、それくう音便形である。

練習 二一

- 一 次の文から音便形を選び出して、これを説明せよ。
- 一 まことに有難うございます。
- 二 ベートーベンの兩眼は異様に輝いて、何物かが乗移つたやう。
- 三 ゴムの用途は、年を追うて益々廣くなるばかりである。
- 四 青白くかはつた老砲手の顔には決心の色が浮んだ。
- 五 汽車は果もなく續いてゐる青田の中を走つた。
- 六 お花鳥のお話は面白うございました。
- 七 二百十日もこれで無事にすんだ。
- 八 わからぬことは問うて見るがよい。
- 九 今の戦争は昔と違つて、一人で進んで功を立てるやうな事は出来ない。
- 一〇 救ひのボートは難破船にたどり着いた。生残つた船員は涙を流

助動詞の種類と活用

受身

れる
られる

可能

して喜んだ。

一七 助動詞の種類と活用

受身の助動詞

猫が犬に追はれる。
精勤者は賞状を與へられる。

右のれる、られるは、他から或動作をしかけられる意をあらはす助動詞であるから、これを受身の助動詞といふ。

れる	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ(ろ)

可能の助動詞

一七 助動詞の種類と活用

四五

れる
られる

彼の地へは五時間で行かれる。
僕はどんな苦痛にも堪へられる。
右のれる、られるは、動作を爲し得る意をあらはす助動詞であるから、これを可能の助動詞といふ。

あの日の事がしのばれる。
母の事ばかり考へられる。
自然的な能 (自然の中に入る)

れる、られるは、又右のやうに動作が自然に起つて止め難い意をあらはすこともある。

可能の助動詞の活用は受身の助動詞に同じである。但し命令形がない。

尊敬

れる
られる

尊敬の助動詞

加藤博士が外遊中の見聞を話される。
先生は我等に尊い教訓を與へられる。

ます

右のれる、られるは、他に對して尊敬の意をあらはす助動詞であるから、これを尊敬の助動詞といふ。
私も参ります。
あなたもお読みになりますか。
ますは、言葉を鄭重にするために用ひられる。

れる	れ	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ

使役の助動詞

使役
せる
させる

父が子に英語を習はせる。
兄が弟に道をたづねさせる。

消す
消す
消す

右のせる、させるは、他を使役して或動作をさせる意をあらはす助動詞であるから、これを使役の助動詞といふ。

せる	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ(ろ)

練習 二二

次の文から受身・可能・尊敬・使役の助動詞を選び出せ。

- 一 先生は明日出發せられるさうだ。
- 二 出征した兵士の苦勞がしみ／＼思ひやられる。
- 三 老僧の一貫した根氣は、遂に村人を恥ぢさせた。
- 四 長いと思つた歐洲航路も過ぎて、しきりになごりが惜しまれます。
- 五 火を使用するのは人類だけで、他の動物には見られない所である。

打消

ない
ぬ
なかつ

打消の助動詞

- 六 ウェリントン公爵ともいはれるえらいお方が、おとうさんの言ひつけに背けとおつしやらうとは、どうしても考へられません。
- 七 傳書鳩は、その飼養所を移動し、其處を見覚えさせて飛歸らせるやうにする事も出来る。
- 八 廣い境内に植込まれた木々は、内地で見られぬ新鮮な緑を着けて打ちそよいでゐる。
- 九 どうなりともお好きなやうになさいませ。

雨は降らない
雨は降らぬ
雨は降らなかつた

右のぬ、なかつは、事がらを打消す意をあらはす助動詞であるから、これを打消の助動詞といふ。

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ない なかつ ぬ		なく なかつ ず	ない	ない	なければ	
			ぬ(ん)	ぬ	ね	

練習 二三

次の文から打消の助動詞を選び出せ。

- 一 其の壯觀は、とても筆や口にはつくされません。
 - 二 突撃前の大事な時になつて、運悪く機關銃が急にきかなくなつた。
 - 三 古代の遺物は、大切に保護して後世に傳へなければならぬ。
 - 四 あなたは日本人、私は印度人。日本と印度と仲よくせねばならぬ。
 - 五 宣長は大急ぎで真淵の後を追つたが、それらしい人は見えない。
- 次の宿まで行つて見たが、やはり追附けなかつた。

完了の助動詞

完了
た(一)

風がまた吹き出した。

これで仕事をやつと片付いた。

右のたは、事がらの完了した意をあらはすから、これを完了の助動詞といふ。

た(二)

昔、頼光が大江山の鬼を退治した。

平家一門は壇浦で滅びた。

たは、又右のやうに事がらが過去に屬する意をあらはすことがある。

た	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
たら		たり	た	た	たら	

練習 二四

推量

う
よう
らしい
まい

次の文から完了の助動詞を選び出せ。

- 一 仕事は大いにはかどつて来た終
- 二 稗田阿禮は記憶力の非凡な人であつた終
- 三 困つたら悪い事でも何でもするといふのが小人である。
- 四 お前は無事であつたか。死んだのではないかと心配した終
- 五 あそこからもう五軒ぐらゐは歩いたらうね未

推量の助動詞

なるほどさういふ考方もあらう。

これこそ生徒の本分を盡したものとはいへよう。

今客が来てゐるらしい。あまのりしやくちしりけ形を成し

満洲でもかう寒くはあるまい。

右のう・よう・らしい・まいは、いづれも推し量る意をあらはす助動詞

であるから、これを推量の助動詞といふ。

願望

たい
たかつ
たがる

願望の助動詞

私は軍人になりたい。

これだけでも完成したかつた。

弟は繪ばかり書きたがる。

特に、まいは否定的に推量する意をあらはす。
又、「歸るだらう」「散つたらう」などのだらう・たらうは、「だら」「たら」に推量の助動詞うの結合したものである。

う よう らしい まい	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
		らしく	う よう らしい まい	らしい		

右のたい、たかつ、たがる、は、いづれも願ひ望む意をあらはす助動詞であるから、これを願望の助動詞といふ。

たい	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
たから	たから	たかつ	たい	たい	たけれ	
たがる	たから	たがり	たがる	たがる		

指定の助動詞

僕も日本男子だ。

これは文法書です。

右のだ、です、は、いづれも指し定める意をあらはす助動詞であるから、これを指定の助動詞といふ。
特に、すは鄭重に指定する意をあらはす。

指定

だ

です

だ	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
です	だら	だつ	だ	な	なら	
	でせ	でし	です			

練習 二五

次の文から推量・願望・指定の助動詞を選び出せ。

- 一 今日のははじめての遠泳だ。指定
- 二 古い言葉を調べるのに一番よいのは萬葉集です。指定
- 三 二人は不意の來客にさも驚いたらしい様子である。指定
- 四 あと七八十軒で敵軍主力の背後に出ることが出来る。指定
- 五 かういふ處で働いてゐる人たちは、すゐぶんつらい事だらう。指定
- 六 我が國民の長所短所を較べたならば、いろ／＼あらう。指定
- 七 あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話でしたね。指定
- 八 叔父さん、負傷された時は痛かつたでせう。指定

- 九 わしの命は、とても仕事の出来るまではもつまいと思ふ。
- 一〇 古い文明のあとをたづねるのが、こゝへ来る旅人の目的なのです。
- 一一 「おれにかまふな。早く撃て。」これが分隊長の言葉だった。

練習 二六

一 次の文中、點をつけた助動詞について、その種類と活用形の名とを述べよ。

- 一 釋迦は衆星の中の満月のやうに國中から仰がれる身となつた。
- 二 さういふ事情ならやむを得ない。
- 三 今一應御評議下さいませすれば、誠に幸でございます。
- 四 古い歴史を聞いて見たいとは、誰でも思ふことです。
- 五 路の遠いのは少しもいとはず、彼は毎日毎日元氣よく通學しました。
- 六 鉛筆や紙も自由には買へなかつた。
- 七 しつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出来た。

へ今のはほととぎすの聲ではなかつたらうか。

二 次の文から助動詞を選び出し、その種類と活用とを述べよ。

- 一 十勝の平野は心ゆくばかり晴々しい處だ。
- 二 どうかして御目にかゝりたいものだ。
- 三 朝鮮から歸つてをられる高橋さんが來られた。
- 四 叔父さんは、あのかんこ鳥の聲が餘程氣に入つたらしい。
- 五 まださう遠くは行きませぬ。
- 六 ゴムは何からどうして造るのだらうか。
- 七 家康が輝政に命じてこの城を築かせたのも、まことに故あることと考へさせられる。
- 八 先生が又泊られることがあつたら、すぐ知らせてもらひたい。
- 九 一日も早くこの洞門を開通して老僧の志を遂げさせたら、同時に我々も難儀をのがれることが出来よう。

助動詞の
續き方

れる
られる
せる
させる
ないぬ

- 一〇 二人は互に信じ合つてゐる仲なので、話はおだやかに運ばれる。
- 一一 一家の人々は、食物なども自由には得られず、時には生のじやがい
もしか食はれないこともあつた。
- 一二 僕はおとうさんから此の門をあけてはならないと言ひつけられ
てゐるのです。

一八 助動詞の續き方

一 未然形に續く助動詞

こゝで泳ぐと流される。
明日朝鮮の叔父さんが來られる。
先生がめいゝに旅行談を語らせる。
弟にボールを買つて來させる。
今となつては間に合はないぬ。

なかつ
う
よう

な

こんな結果にならうとは思はなかつた。
水の深さは十米以上もあらうと思ひます。
私も參拜して來ようと思つてゐます。
右のれるられるせるさせるないぬなかつうようはいづれも動詞
の未然形に續く。但しさせるは動詞の場合と區別すべきである。
これらの中れるせるうは四段活用の未然形にられるさせるよう
はその他の動詞の未然形につく。

又ないぬようが、さ行變格活用の未然形につく時は、次のやうに
用ひられる。

僕はまだ一日も缺席しない。
缺席せぬやうにしなさい。
日曜には遠足しよう。

せる
る
四
土せる
外
日
外

ます た たい たかつ たがる
らしい まい

二 連用形に續く助動詞

これからすぐ参ります。
宣長は古事記の研究をしようと思した。
山道をあへぎあへぎ登つた。
泣きたいくらゐつらい。
音楽だけは習つておきたかつた。
あの人は何でも聞きたがる。
右のやうに、ます、たい、たかつた、がる、はいづれも連用形につゞく。
但したは、音便形にもつゞく。

三 終止形に續く助動詞

秋野君は退學するらしい。
そんなはずはあるまいと思ふ。

やう

だ ます

右のやうに、らしい、まい、は終止形につゞく。
但し、らしいは動詞以外の語につゞくこともあり、又、まいは、四段活用以外の動詞には、「見まい」「覺えまい」「來まい」「關係しまい」のやうに、その未然形につゞく。

四 諸語に續く助動詞

僕も日本男子だ。
月には空氣も水もないのだ。
私は音楽家です。
私は何も知らないのです。
此の雪はちきに消えるでせう。
右のやうに、だ、は體言及び助詞のにつゞき、ですは體言、助詞の及び用言の連體形などにつゞく。

練習 二七

- 一 次の助動詞について其の續き方を説明せよ。
着られる、成功したい、新聞です、吹くらしい、行かせる、知られる、遊びたがる、
- 二 次の文に誤があつたらこれを正し、且その理由を述べよ。
 一 あの人にはまた来ようと言つて歸りました。
 二 人が大勢ゐて十分には見れなかつた。
 三 君の思ふやうに改めさうとしてもだめでしよう。
 四 これからは遅刻せないやうにとめよう。
 五 五時には起きやうと思つてゐたのだが、眠くてとても起きられなかつた。
 六 下關からは一晝夜位で東京へ來れる。

體言に附く助詞

の が へ に を

一九 助詞の用ひ方

一 體言に附く助詞

が の を に へ より から と で = I go to school *o* the market.

右の助詞は、主として體言に附いて、體言の役目を示す。
 が 初雪が降る。
 の 風の吹く日。
 が 太郎の友人。

がの、は、體言に附いて、その體言が主語なることを示し、又の、は上の體言が下の體言の意味を修飾することを示す。

を (目的)
 に (目的)
 へ (方向)
 を 花を見る。
 に 兄が弟に、鉛筆を與へる。
 へ 舟は一路東へ進んだ。

より
から

より(比較) 父母の恩は海より深い。
から(原因) 校長から賞状を受けた。
をにへよりからは、體言に附いて、その體言が下の用言の意味を修飾することを示す。

と
標準

と(場所) 義經は幼名を牛若丸といつた。
夏川君と秋山君とが来た。
とは、體言に附いて、その體言が下の用言の意味を修飾することを示し、又物事を並列する用をなすこともある。

で

で(場所) 正成は湊川で戦死した。
では、體言に附いて、その體言が下の用言の意味を修飾することを示す。

練習

三八 山と山の中が来た。山と山の中が来た。山と山の中が来た。

山と山の中が来た。山と山の中が来た。山と山の中が来た。

次の文から、體言に附く助詞を選び出せ。

- 一 今はたゞ運を天に任せよう。
- 二 きたへた腕は鐵より堅い。
- 三 ゴムで造つた物は甚だ多い。
- 四 小さな子供が奥からかけ出して來た。
- 五 文吉は錦町の方へ駆け出した。
- 六 徳のある者なら、天が助けるはずだ。
- 七 柿本人塵は歌の道にすぐれてゐたので、後世歌聖とたへられる。
- 八 世界一といはれるナイヤガラの瀧は、アメリカ合衆國とカナダとの國境にある。

二 用言に附く助詞

ほと ても けれども が のに ので から て
ながら し たり

用言に附
く助詞

右の助詞は、用言に附いて、接續の用をなす。

ば 假定 君が行けば僕も行かう。

と 場合の時 秋になると雁が来る。

ても 假らざるもの 願つてもゆるされまい。

けれども 練習するけれども上達しない。

ば といてもけれどもは条件を擧げて次へ續ける用をなす。

けれどもは又けれどもといふ。

が 英語は讀めるが、獨逸語は讀めない。
がのには反對の意を示し、のてからは原因理由を示して、それく

のに 秋になるのに稲はまだ實のらない。

ので 雨が降るので遠足は中止した。

から 寒いから窓をしめませう。

がのには反對の意を示し、のてからは原因理由を示して、それく

ば と ても けれども からも けれど

が のに ので から

次へ續ける用をなす。

て 春が過ぎて、夏が來た。

ながら 歩きながら話ませう。

ては主として一つの事の終つた意を示し、ながらは動作の反復繼

續する意を示して、それく、次へ續ける用をなす。

し 林檎もあるし、蜜柑もある。

たり 笛を吹いたり、太鼓をたいたりして大騒ぎだ。

いたり、事は、事を列擧する意を示して次へ續ける用をなす。

練習 二九

次の文から、用言に附く助詞を選び出せ。

- 一 師弟の關係は日一日親密の度を加へたが二人の面會の機會はとうとう來なかつた。
- 二 一同は校歌をうたひながら歸途に就いた。

て ながら たり

し たり

- 三日にやけ仕事にやつれて年の頃もよくわからぬ。
- 四海のやうな湖から流れる大きな河が一大絶壁をみなぎり落ちるのですから、その壯觀は筆や口には盡くされません。
- 一昨日海軍のにいさんが休暇でお歸りになつたので、にぎやかです。
- 六學校に入れてもらひたいと願つたけれども、許してくれなかつた。
- 七保護色をもつてゐると、容易に他の動物におそはれない。
- 八あの人は、信用はあるし、それにわき目もふらず働くので、店はだんだん繁昌した。
- 九こんな重寶なものがあるのに、これを利用しないのは、寶の持ちぐされだ。
- 一〇公共の事務に當るものが如何に其の職務に忠實であつても、もし一般の人民の後援がなければ、自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。

諸語に附く助詞

は も こそ

- は も こそ さへ ても しか
- ばかり だけ ぐらゐる まで など か
- かな ぞ とも
- や よ な なあ ね さ
- の

二 時にぶなの密林が、梢の間から青空をのぞかせたり、茂みをもれる太陽の光が、下草のしだの緑を鮮かに浮立たせたりした。

三 諸語に附く助詞 一番と事

右の助詞は、諸語に附いて意味をそへる用をなす。

は 他と見ると 弟には、萬年筆をやつた。

も 他ヨクと見ると 京都にも、友人がある。

こそ 國語こそは國民の魂の宿る所である。

は、は或物事を他と區別し、もは主として他の物事を包容し、又こそは或物事を特に取出して示す意をそへる。

さへ 禽獸さへ恩を知つてゐる。

でも 當地の氣温は夏でも八十度に達しない。

しか この舟には五人しか乗れない。

さへでもは一つの物事を擧げて他を言外に推定させる意をそへ、しかは一つの物事を擧げて他を否定する意をそへる。

ばかり 意見をのべたのは僕ばかりだ。

だけ 君にだけ話さう。

ばかり、だけ、は、主としてそれと限る意をそへる。

ぐらゐ もう十人ぐらゐ参りました。

まで 私は南京まで行きました。

など これなどは相當にいゝ品です。

か ~~か不ぬぬ~~ 誰かあそこに立つてゐる。

ぐらゐは程度を、までは主として限度をいひ、などは専ら物事をおほよそに言ふに用ひられ、又かは不確定の意をそへる。

か あれは富士山ですか。

な 物をそまつにするな。

ぞ ~~ぞ~~ 今日はあるの山へ登るのだぞ。

とも え、それで十分ですとも。

かは疑問反語、なは禁止、ぞは指し示す意、ともはもちろんだとの意をそへる。いづれも文の終にだけ用ひられる。

や ~~や~~ 武雄や、はやくおいで。 ~~下の者もかこつていふ~~

父や、母に相談してみます。

よ な な ね さ の

よ 私も参りますよ。
皆集つてゐるだらうな。

なあ感動 正一君は感心だなあ。

ね 今日午後からだいぶ冷えますね。

さ まあ、だまつてついて来るさ。 **南東**

やは呼びかける語に附いて感動の意をそへ、又物事を並列する用をなす。よ、な、なあ、ねは感動の意、さは言ひ放つ意をそへる。

これらの助詞は、文の終にも中間にも用ひられる。

の そこにゐるのは誰だ。

右のの、は體言に代用されたものである。

練習 三〇

次の文から、諸語に附く助詞を選び出せ。

一 北國に住む野うさぎや高山の上に居る雷鳥は、夏は枯葉や土の色に似てゐる。

二 あの清水まで行くと、石井君のうちが見えるはずだ。

三 多くの湖沼中、十和田湖より深いものは田澤湖だけである。

四 太陽こそはあらゆる生命の源泉なのである。

五 犬の世話やねずみを取ることはかり熱心では困るではないか。

六 雨はごくたまにしか降りません。

七 エッフェル塔にも登つて見ました。塔の中には音楽堂なども設けられてあります。

八 此の美術館は、ごくざつと見るにさへ、三日ぐらゐはかゝらう。

九 誰か帽子を振りながら僕等に叫んでゐる。

一〇 「君、いつか僕の家へ来てくれるだらうね。」うん、行くとも。

一一 君子でも困られることがあるのですか。

一二 あんな高い山へ登れる人があるのかなあ。

三 いよ／＼頂上に近づいたな。眺望はきつとすばらしいぞ。

四 笑つて下さるな、どうもこれはわしの娘のやうに思へてならぬ。

五 「一體お前は何をたべるのか」「びつくりしちやいけませんよ。わしのたべ物といふのはね、行者さん、人間の生肉、それから、のみ物といふのが人間の生き血さ。」

二〇 文の成分

一 主語

水仙が 咲く。

私も 嬉しい。

右の文に於て、水仙が、私もは主語である。主語はこのやうに體言を本として成る。

僕のは ない。

主語(一)

走るのが 速い。

右の僕のは走るのがも主語である。これは體言、用言の連體形に助詞のの附いたものを本として成る。

主語(二)

二 述語

日が 入る。

風が 寒い。

森は 静かだ。

右の入る、寒い、静かだは述語である。述語はこのやうに用言から成る。

述語(一)

空は 晴れませう。

風が 吹出すだらうか。

右の晴れませう、吹出すだらうかは、それ／＼用言に助動詞、助詞が

述語(二)

附いてゐるが、これも亦述語である。

正成は 忠臣だ。

秀吉は 英雄です。

高山さんは 立派な人物なのです。

右の忠臣だ、英雄です、人物なのですも述語である。これは體言に

指定の助動詞などが附いたものである。

練習 三一

次の各々の文の主語・述語を指摘せよ。

一 敵が 高射砲を打出した。

二 檜は 濕氣に耐へる。

三 東京は 日本の首府です。

四 迎への 自動車が 來ました。

五 博士は 滿堂の 聽衆を 喜ばせた。

修飾語

六 川の 水量は 極めて 豊かだ。

七 林君には 僕は 會はなかつた。

八 登山者は 案内人から いろいろの 注意を受けた。

三 修飾語

鐘の音が 聞える。

柳が 柔かな芽を 出した。

流が たいそうゆるやかだ。

右の文に於て、鐘の柔かな、たいそう、ゆる、音、芽、ゆる、やかだの

修飾語である。

修飾語には、連體修飾語連用修飾語の二種がある。

連體修飾語

五重の塔が 聳えてゐる。

遠い山々は 霞んでゐる。

連體修飾語

詩人は行く春を歌ふ。
 畫家はのどかな景色を描く。
 右の五重の遠い行くのどかなは、いづれも體言の修飾語である。
 かういふ修飾語を連體修飾語といふ。
 連體修飾語は、右の文例に示したやうに、五重のやうに體言に助詞の附いたもの、或は遠い行くのどかなのやうに用言の連體形から成る。

連用修飾語

陸路は甚だ遠い。
 樹木が青々と茂つてゐる。
 電話がたいそうはつきりと聞える。
 右の甚だ青々とは、いづれも用言の修飾語、たいそうは副詞の修飾語である。かういふ修飾語を連用修飾語といふ。

連用修飾語

連用修飾語は、右の文例に示したやうに、主として甚だ青々とたいそうのやうな副詞から成る。

義経が平氏を討つ。
 夕方目的地に着いた。
 秀吉は關白となつた。
 彼は神戸へ向かつた。
 君恩は海より深い。
 猿も木から落ちる。
 兄は飛行機で行つた。

補語
 目的語
 客語

右のやうに、體言にをに、とへよりから、て等の附いた語も亦連用修飾語である。

練習 三二

次の文から連體修飾語と連用修飾語とを選び出せ。

- 一 車の往來がさわがしい。
- 二 狐の鳴聲がしきりに聞える。
- 三 本居宣長は伊勢國松阪の人である。
- 四 喜の聲がどつと起つた。
- 五 椰子の街路樹が涼しいかげを作つてゐる。
- 六 分列行進は誠にりつぱに行はれた。
- 七 すさまじい大砲の音が、ずどんととゞろき渡つた。
- 八 電信電話の發明は實に全世界を驚かした。
- 九 兄は滿洲へひとりで旅立ちました。
- 一〇 連絡船は釜山に着いた。
- 一一 南洋の島民ももう文化人の仲間です。
- 一二 島の野菜があざやかな緑を見せる。
- 一三 五月の太陽は、農家の藁屋根に光彩を與へる。

四 獨立語

日本國民、これこそ吾々の常に持つてゐる誇である。
あゝ、空模様がだいぶ悪くなつてきた。

加藤君、君も一奮發し給へ。

國語は國家國民と離すことの出来ないものである。だから、
國語を忘れた國民は國民ではない。

右の日本國民あゝ加藤君だから、いづれも他の成分から獨立し
た語であるから、これを獨立語といふ。

獨立語は、日本國民のやうに特に提示された語あゝのやうな感動
詞、加藤君のやうな呼掛の語、或はだからのやうな接續詞から成る。

練習 三三

次の文から獨立語を選び出せ。

獨立語

一 動詞活用表

用活段一下	用活段一上	用活段四	活用の種類		
やまはなたさかあ 行行行行行行行	わらやまはなたさか 行行行行行行行	らまはなたさか 行行行行行行行	語幹		
榮眺與尋捨載受「得」	「居」懲老試用「煮」落信起	有讀習死立押書	未然形		
えめへねてせけえ	ありいみひにちじき	らまはなたさか	連用形	語	
えめへねてせけえ	ありいみひにちじき	りみひにちしき	終止形		
えめへねてせけえ るるるるるるる	ありいみひにちじき るるるるるるる	るむふぬつすく	連體形		
えめへねてせけえ るるるるるるる	ありいみひにちじき るるるるるるる	るむふぬつすく	假定形	尾	
えめへねてせけえ れれれれれれれ	ありいみひにちじき れれれれれれれ	れめへねてせけ	命令形		
えめへねてせけえ よよよよよよよ	ありいみひにちじき よよよよよよよ	れめへねてせけ			

一動詞活用表

活變 用格	用活段一下	用活段一上	用活段四	活用の種類
	さか 行行	わらやまはなたさかあ 行行行行行行行行行	わらやまはなたさか 行行行行行行行行行	
「爲」 「來」	植流榮眺與尋捨載受「得」	「居」懲老試用「煮」落信起	有讀習死立押書	語幹
しせこ	ゑれえめへねてせけえ	ゐりいみひにちじき	らまはなたさか	未然形
しき	ゑれえめへねてせけえ	ゐりいみひにちじき	りみひにちしき	連用形
すく るる	ゑれえめへねてせけえ るるるるるるるるる	ゐりいみひにちじき るるるるるるるるる	るむふぬつすく	終止形
すく るる	ゑれえめへねてせけえ るるるるるるるるる	ゐりいみひにちじき るるるるるるるるる	るむふぬつすく	連體形
すく れれ	ゑれえめへねてせけえ れれれれれれれれれ	ゐりいみひにちじき れれれれれれれれれ	れめへねてせけ	假定形
しせこ ろよい	ゑれえめへねてせけえ (よ)(よ)(よ)(よ)(よ)(よ)(よ)(よ)	ゐりいみひにちじき (よ)(よ)(よ)(よ)(よ)(よ)(よ)(よ)	れめへねてせけ	命令形

語
尾

指 定	推 量	願 望	完 了	
で す	ま ら い よ う	た が る	た か ら	た め
で せ		た が ら	た か ら	た ら
で し	ら し く	た が り	た か つ	た す
で す	ま ら い よ う	た が る	た い	た め (ん)
な	ら し い	た が る	た い	た め
な ら			た け れ	た ね

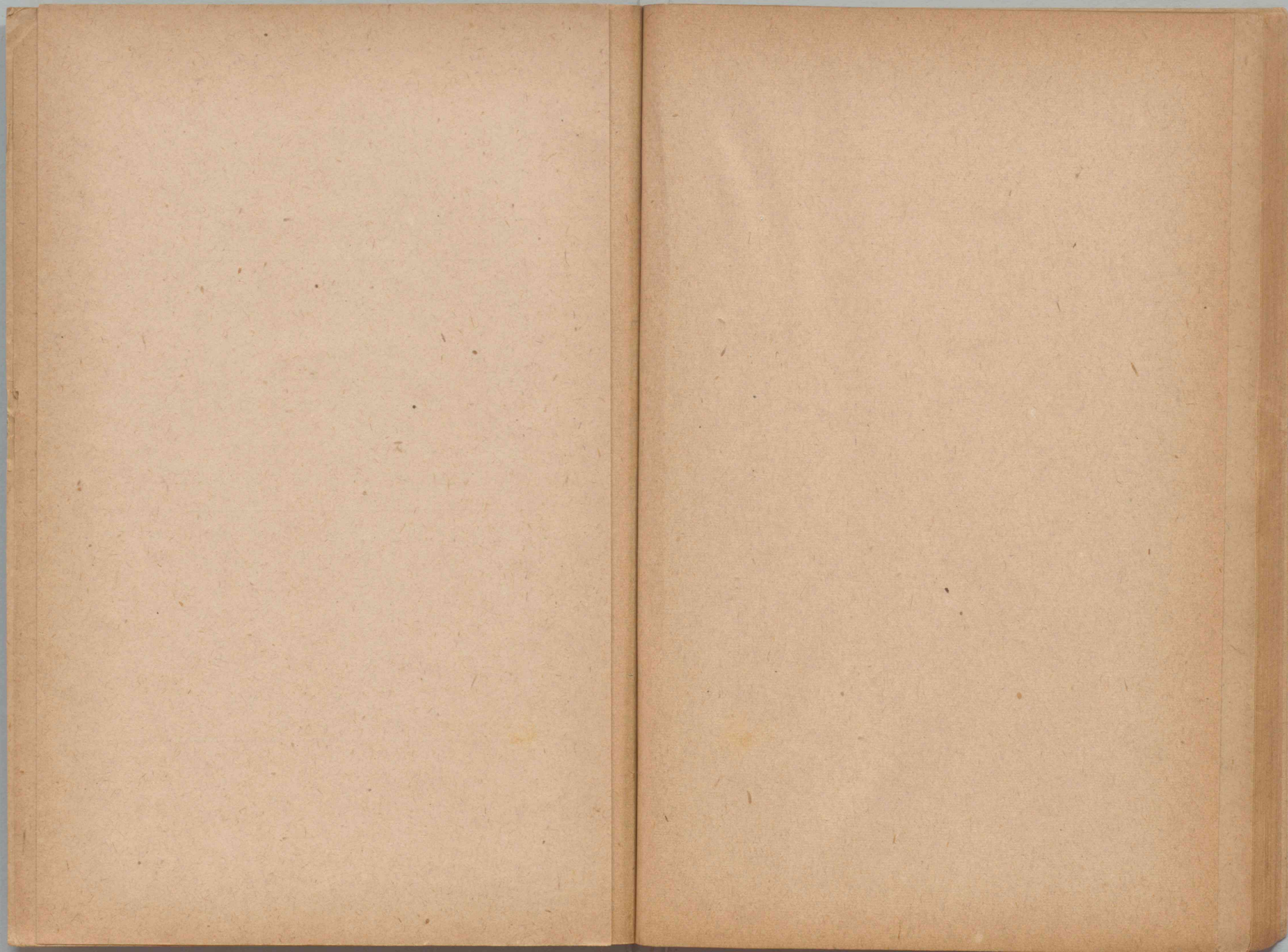
指 定	推 量	願 望	完 了	打 消	使 役	尊 敬	可 能	受 身	種 類
だ す	ま ら し う い	た か ら た い	た	ぬ な か つ	さ せ る	ま ら れ る	ら れ る	ら れ る	本 形
だ ら せ		た か ら た が ら	た ら		さ せ	ま ら れ る	ら れ	ら れ	未 然 形
だ し	ら し く	た か つ た が り	た し	す な か つ	さ せ	ま ら れ る	ら れ	ら れ	連 用 形
だ す	ま ら し う い	た か ら た い	た	ぬ な い	さ せ る	ま ら れ る	ら れ る	ら れ る	終 止 形
な	ら し い	た か ら た い	た	ぬ な い	さ せ る	ま ら れ る	ら れ る	ら れ る	連 體 形
な ら		た か ら た け れ	た ら	ぬ な け れ	さ せ る	ま ら れ る	ら れ る	ら れ る	假 定 形
					さ せ よ ろ	ま せ		ら れ よ ろ	命 令 形

二 助動詞活用表

指 定	推 量	願 望	完 了	打 消	使 役	尊 敬	可 能	受 身	種 類
だ す	ま ら し う よ う い	た た た が ら た い	た	ぬ な か つ な い	さ せ る さ せ る	ま ら れ る ま す	ら れ る ら れ る	ら れ る ら れ る	本 形
だ せ		た た が ら た か ら	た ら		さ せ	ま ら れ ま せ	ら れ ら れ	ら れ ら れ	未 然 形
だ し	ら し く	た た か つ た が り	た ら	す な か つ な く	さ せ	ま ら れ ま し	ら れ ら れ	ら れ ら れ	連 用 形
だ す	ま ら し う よ う い	た た が ら た い	た	ぬ な い (ん)	さ せ る さ せ る	ま ら れ る ま す	ら れ る ら れ る	ら れ る ら れ る	終 止 形
な	ら し い	た た が ら た い	た	ぬ な い	さ せ る さ せ る	ま ら れ る ま す	ら れ る ら れ る	ら れ る ら れ る	連 體 形
な ら		た た け れ た い	た ら	ぬ な げ れ な い	さ せ る さ せ れ	ま ら れ る ま す	ら れ る ら れ れ	ら れ る ら れ れ	假 定 形
					さ せ よ う (る)	ま せ		ら れ よ う (る)	命 令 形

二助動詞活用表

9 8 6 5 4 3 2 1
 ✓ ✓ ✓ ✓



三 助動詞接續表 (*印の語は接續上特に注意を要する)

諸語	終止形	連用形	未然形	活用形
指 定	推 量	願 望	完 了	尊 敬
だ・です	ま [*] ら [*] しい	たい・たから・たがる	た ます	推 打 使 尊 受 敬 身 ・ 可 能
				量 消 役 能
				う [*] ・よ [*] う
				ない [*] ・ぬ [*] ・なかつ
				せる [*] ・させる
				れる [*] ・られる
				類

昭昭昭昭昭昭
 和和和和和和
 十十十十十十
 五五五五二二
 年年年年年年
 八七四四十五
 月月月月月月
 一廿三廿二十
 八十五五五十
 日日日日日日
 訂訂修修訂訂
 正正正正正正
 四四三三再再
 版版版版版版
 發發發發發發
 行行行行行行



法語口學中
 版正修
 年學一第

定價金四十錢

著者 岩井良雄

發行者 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地 中等學校教科書株式會社

代表者 山本慶治

印刷者 東京市神田區小川町二丁目十二番地 西川喜右衛門

(東東四一二三)

(刷印社英秀社會式株)

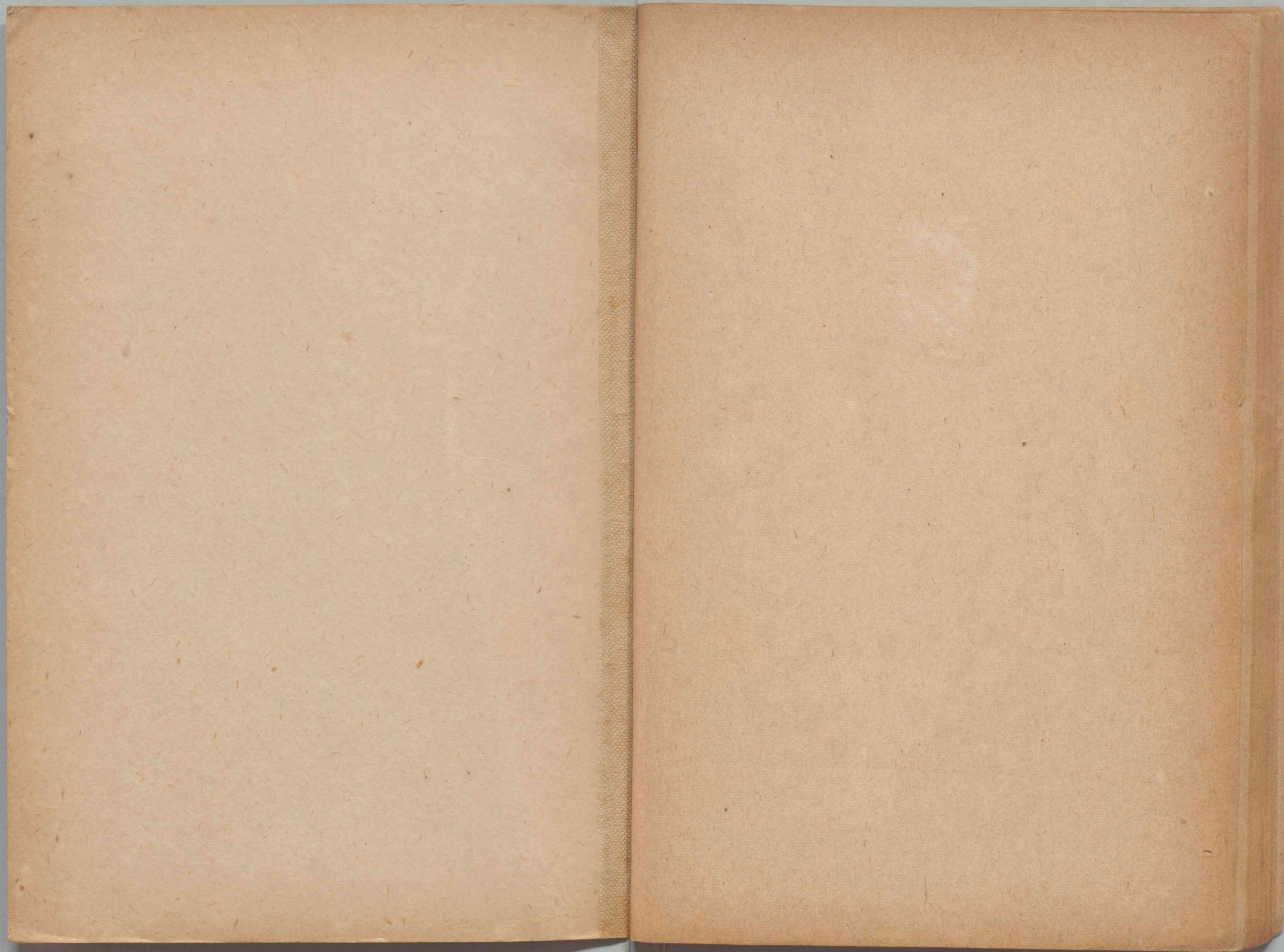
發行所

東京市麴町區
飯田町二丁目二十番地

中等學校教科書株式會社

日本出版文化協會會員番號一七五二二

(略名 目黒岩井口語法)



文庫

40

766

広島大学図書

2000034766

